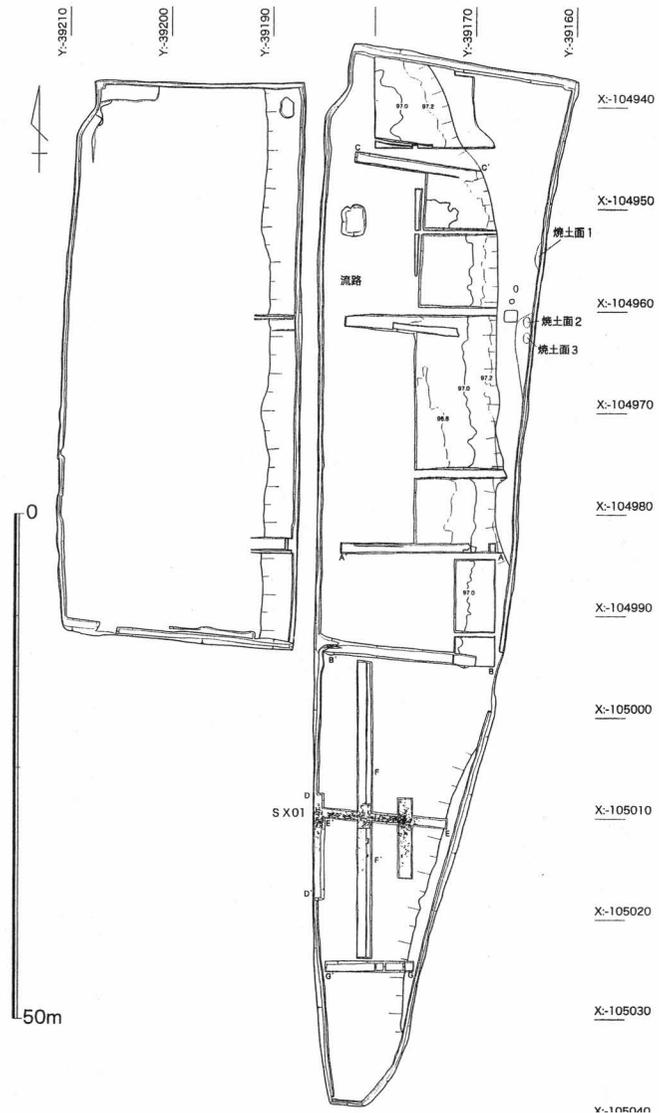


縄文時代に形成され、埋没したと思われる検出全長115m、最大幅25m、検出面からの深さ1m以上の流路があり、その流路の東肩部から4mの範囲で軒平瓦・軒丸瓦のほか、熨斗瓦・平瓦・丸瓦・磚などが多量に出土しており、その瓦の多くが破損・変形・癒着しているものであった。

これらの瓦の状況、流路内から炭・焼土塊・窯壁などが出土しており、瓦窯に伴う灰原である可能性が高く、周辺には瓦窯の存在が想定できる。また、調査地南側では流路に直交する形で、瓦あるいは石を利用して突堤状に積み上げた状況(S X01)が確認でき、流水の調整施設であるとともに簡易な船着き場としての機能を有した構造物であると担当者は考えられている。

瓦窯の位置については、亀岡市教育委員会が実施した磁気探査^(注2)によると調査地区でいう16A区(調査地の北側)で磁気の変動があり、調査地の東側斜面に瓦窯の存在が予想されている。

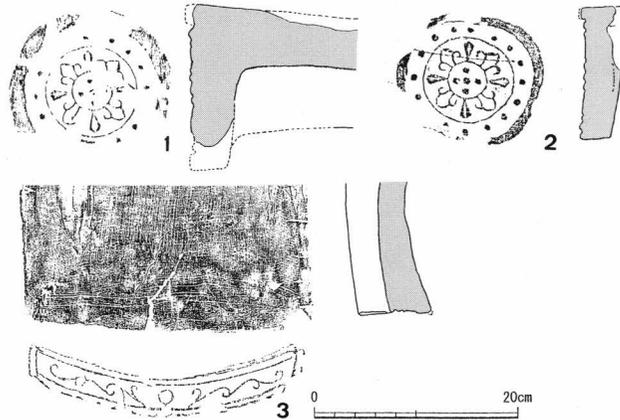
三日市遺跡第3次調査では、遺構の重要性から遺跡の保存が検討されている。このため、トレンチ西壁部分の瓦と調査時に露呈した軒平瓦・軒丸瓦のみを取り上げて整理作業を行っている。その整理結果によると、軒丸瓦は一本造りの忍冬文軒丸瓦で範傷をもたない軒丸瓦がS X01の突堤状に積み上げた遺構で、範傷をもつ軒丸瓦が流路内から出土している。軒平瓦



第2図 三日市遺跡遺構図

は柄鏡状の中心飾りで左右に唐草文を配した均整唐草文軒平瓦であり、軒丸瓦・軒平瓦とも丹波国分寺の創建時の瓦と同範のものである。

ただ、詳細にみると軒丸瓦の瓦当に範傷がないもの(SX01)とあるもの(流路内遺物)があり、丹波国分寺の



第3図 三日市遺跡出土軒瓦

創建時に使用された瓦の中にも若干範傷のあるものが含まれていることは指摘されている。

三日市遺跡では瓦生産に必要な工房跡が検出されておらず、その実態については今後の調査成果に期待されるところが大きいですが、丹波国分寺の造営に係わる瓦窯であることが明らかとなった。

3. 丹波国分寺と三日市遺跡

丹波国分寺跡の発掘調査は、1982年(昭和57年)から亀岡市教育委員会^(注3)により継続して進められ、金堂跡・塔跡・講堂跡・中門跡・僧坊跡・鐘楼跡を確認しており、寺域は方二町(約245m四方)の規模を有していることが確認されている。

亀岡市教育委員会による国分寺跡の調査成果によると、軒丸瓦13種、軒平瓦10種が確認され、創建時の軒瓦は忍冬文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦がセットであり、金堂の創建瓦として八葉蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦がセットとなる。丹波国分寺跡の軒瓦と平城京の寺院から出土した軒瓦を分析した山崎信二^(注4)は、丹波国分寺跡の軒丸瓦は唐招提寺・西大寺・西隆寺と、軒平瓦は唐招提寺・法華寺・薬師寺出土の軒平瓦と同範のものがあり、これら平城京諸寺の軒瓦と丹波国分寺跡の軒瓦を比較すると、範傷の多くなったものが丹波国分寺の瓦に使用されていることを明らかにした。このことから、丹波国分寺の造営時期を推測すると、西大寺の創建の天平神護元年(765年)、西隆寺の創建の神護景雲元年(768年)以降の創建が考えられている。また、丹波国分寺は平安時代中期に塔・金堂が廃絶し、平安時代後期に金堂の再建、塔は大規模な修理または再建が行われ、再建された金堂は鎌倉時代後半に焼失したことが知られている。

なお、丹波国分寺とは中軸間で約450mにあり、東西約150m、南北約180mの寺域を有

する丹波国分尼寺(御上人林廃寺)でも丹波国分寺・三日市遺跡と同範の瓦が使用されている。

三日市遺跡は、丹波国分寺・国分尼寺の造営に係わる瓦窯で、現道路を利用して生産地である三日市遺跡から供給先である丹波国分寺・国分尼寺へ瓦を供給したと仮定すると、その直線距離は約1.75km、現道路を利用して2.3kmを測る。また検出した流路を利用して水運で重い瓦を運んだ可能性もあることは前述したとおりである。



第4図 亀岡盆地の主要古墳と古代寺院跡

4. 国分寺造営以前の亀岡盆地の古代寺院

亀岡盆地では飛鳥時代以降、奈良時代にかけて4か所の寺跡が確認されており、丹波・丹後地域での寺跡が密集する地域であることが知られている。

亀岡盆地はその中央に桂川(保津川)がながれており、その川を挟んだ川東地域では池尻廃寺と丹波国分寺・国分尼寺が、川西地域では北から桑寺廃寺・興能廃寺・観音芝廃寺がある。

池尻^(注5)廃寺は、亀岡市千歳町池尻で、道路幅12m・長さ190mの範囲を発掘調査したところ、藤原京期の瓦とともに、礎石建物や掘立柱建物跡、溝、落ち込みなどを検出したことから、この遺跡(池尻遺跡)が古代寺院の可能性があると指摘された。また2000年にも国営農地再編整備事業に伴う事前調査^(注6)として亀岡市教育委員会が発掘調査を行い、西辺12.5m以上・北辺14.5m

池尻廃寺	興能廃寺	観音芝廃寺	桑寺廃寺	古代寺院名 年代
				700年
				800年

第5図 亀岡盆地における古代寺院出土軒瓦

以上の瓦を積み上げた瓦積基壇を検出し、1994年の発掘調査結果を総合して、寺域は東西135m、南北140mの寺跡で、瓦積基壇は金堂跡の可能性が高くなった。その出土遺物から白鳳期に造営が行われ、藤原京期に一部改修が行われている寺跡であることが明らかとなった。創建時には細弁十五葉蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦を使用、改修時には単弁八葉蓮華文軒丸瓦(6121A型式系)と変形忍冬唐草文軒平瓦(6647C型式系)の軒瓦がある。また平瓦に「ハ」の字状の縄叩きのものが含まれていることから、柴暁彦^(注7)は本葉師寺の瓦工人との関連を指摘している。

桑寺^(注8)廃寺は、道路拡幅に伴う幅3mとかぎられた範囲の発掘調査で、基壇と思われる高まりとその西側で段差があり、東端で築地あるいは柵列を検出し、寺域の東西幅が150mであることを確認している。塔・金堂などの主要建物はまだ明らかではない。桑寺廃寺は丹波国府跡と推定されている千代川遺跡に隣接しており、国府付属寺院の可能性もある。桑寺廃寺では軒丸瓦3種、軒平瓦2種が出土しており、軒丸瓦には素弁八葉蓮華文・複弁八葉蓮華文、軒平瓦は重弧文で飛鳥時代末期様式の軒瓦が出土している。

與能^(注9)廃寺は亀岡市曾我部町寺に所在し、與能神社の御旅所の裏で礎石をみつけ、その北方の無量寺にその礎石が残っている。また御旅所周辺の農業水路の掘削時に複弁八葉蓮華文軒丸瓦(6276系型式・本葉師寺系)と扁行唐草文軒平瓦(6641型式系)が出土しており、藤原京期の寺の存在が予想されている。

観音^(注10)芝廃寺は篠町馬堀に所在し、1986・1987年に発掘調査を実施し、金堂跡・講堂跡・僧坊跡のほか、寺域を推定する築地跡を検出し、一辺が115mの一町四方の寺域を有することか確認されている。また、平安時代後期の溝を検出しており、寺域が平安時代後期には縮小されていることが明らかになっている。観音寺廃寺の創建瓦は京都市西京区の檜原廃寺の創建瓦と同じ文様系列の重弁文軒丸瓦が、軒平瓦は型引きの三重弧文軒平瓦である。改修瓦には本葉師寺系の軒瓦があり、範の進行状況から観音寺廃寺から大阪府四条畷市正法寺へと範が移動していることも知られている。観音芝廃寺は桑寺廃寺と同様、飛鳥時代に創建され、奈良時代後期に大きく改築していること、近接した篠須恵器窯の存続と同様に、10世紀末まで存続していることが明らかとなっている。

このように、亀岡盆地において7世紀後半に観音芝廃寺・與能廃寺・桑寺廃寺・池尻廃寺が相次いで造営される。これら四寺は與能廃寺・桑寺廃寺・池尻廃寺が丹波国分寺の造営直前の奈良時代後期には廃絶しており、観音芝廃寺のみが国分寺の造営以後も存立していることとなる。観音芝廃寺は10世紀末の篠窯跡群の操業が終了する時期と期を一にして縮小しており、その位置からも篠窯跡群を統括した私寺の性格を帯びた寺であった可能性が高い。

各寺跡の立地・周辺部での様相をみると、與能廢寺は摂津へ抜ける国道425号線にあり、曾我部という地名、ソシの三宅の所在が推定されている。桑寺廢寺も平安時代の駅の幹線道路沿いにあり、観音芝廢寺も葛野郡から丹波・山陰へ抜ける街道の起点に立地している。

飛鳥時代に遡る古墳時代では、池尻廢寺は近接して坊主塚・天神塚・千歳車塚古墳があり、古墳時代後期には池尻古墳群などがある。與能廢寺でも犬飼古墳群など前期の時期のものもあるが、その主体は古墳時代後期である。桑寺廢寺では丸塚古墳などその実態が明らかではないものもあるが、古墳時代後期には80基以上の古墳が密集する小金岐古墳群などがある一方、観音芝廢寺では古墳時代前期に向山古墳、中期には柵塚古墳・滝ノ花塚古墳などがあるが、古墳時代後期の群集墳は確認されておらず、前三者とは様相が異なっている。

各寺の瓦を供給した瓦窯の実態は、観音芝廢寺の平安時代後期の瓦窯が王子瓦窯であったこと以外は不明である。

5. 各地における国分寺とその関連瓦窯の事例

国分寺・国分尼寺は聖武天皇の発願により天平13年2月に詔がだされ、天平16年7月、四畿内・七道諸国にむけ国別に正税四万束を割取り、僧尼寺に各二万束を入れ、出挙の利を造営費に当てている。また、同年10月に国師に造国分寺の実情を檢校し、早成に図るよう措置するようにとの命が出されているが、その実態は国家が期待するように進んでいなかったことが窺える。その造営時期に関しては一律ではなく、各国の諸事情によって異なっている。ここでは各国国分寺・国分尼寺の造営にあたり、その瓦窯の類例を列挙していく。

A. 東山道

a. 陸奥国 陸奥国分寺は陸奥国庁でもある多賀城跡の北東方向約10kmにあり、国分寺と国分尼寺は約700m離れている。陸奥国では多賀城の造営ののち、やや遅れる多賀城政庁第Ⅱ期に国分寺が造営されるが、国分寺に使用された瓦の多くは多賀城跡と同じ瓦窯からの供給である。

多賀城・陸奥国分寺に係わる瓦窯は通称「台ノ原・小田原(註11)丘陵」に分布している。台ノ原・小田原丘陵に立地する窯跡群は5世紀後葉に大蓮寺窯跡で生産を開始されるが、短期的な操業で本格的に継続した操業を開始するのは7世紀中葉以降である。8世紀前半には多賀城が創建され、宮城県内北部の下伊場野窯跡、木戸窯跡群、大吉山窯跡群、日の出窯跡群で瓦生産を展開し、8世紀末にはこれまでの郡単位であった須恵器窯を集約する形で統合される窯跡群である。

蟹沢瓦窯は、国分寺の北方約3.5kmにある。多賀城・陸奥国分寺の係わる多賀城Ⅱ期に造られる、東北地方での古代瓦窯として唯一のロストル型式の平窯構造である。多賀城Ⅲ期以降には、地下式構造の窯をもつ安養寺下瓦窯跡、半地下式構造の窯をもつ安養寺中囀瓦窯跡がある。大沢瓦窯跡は4基の地下式構造の瓦窯で多賀城Ⅳ期の国分寺の大改修で使用された瓦を焼成している

b. 下野国 下野国での古墳時代の須恵器窯の実態は不明であるが、8世紀には東部の益子窯跡群と西部の三轟山麓窯跡群の2大窯跡群^(注12)が成立する。三轟山麓窯跡群は北山・八幡窯跡が8世紀初頭の窯であり、8世紀前半～中頃の未発見の窯を挟んで9世紀後半には窯の操業を終える。この三轟山麓窯跡群では8世紀後半から9世紀中頃にかけて須恵器量産体制に入り、この時期に瓦陶兼業窯が存在する。

下野国分寺に関連した瓦窯として町谷瓦窯跡^(注13)・鶴舞瓦窯跡・水道山瓦窯跡がある。

町谷瓦窯跡は、下野国分寺とは直線距離にして17kmの位置にあり、7基の地下式窖窯を検出している。写真資料によると平瓦を窯の主軸に対して直交するように床面幅に並べ階段状の施設を造るもので、京都府木津町瀬後谷1号窯に類似している。この窯で焼成された瓦には「那瓦」・「賀」などと那佐郡・芳賀郡(都賀郡か)などの郡名を印刻された瓦が出土している。

鶴舞瓦窯跡は、出土瓦の検討から創建後の改修に伴う補修瓦を焼いた窯の可能性が高い瓦窯である。鶴舞瓦窯跡の窯はロストル型式の平窯である

水道山瓦窯は、宇都宮南部丘陵に造られた小規模な窯跡群の中にあり、8世紀中頃の開窯段階に水道山瓦窯がある。水道山瓦窯の築窯当初は下野薬師寺の造営に係わった1・2号窯を築き、そののち、3号窯を構築して下野国分寺のほか上津主廃寺、推定河内郡衙跡にも瓦を供給している。下野国分寺への瓦の供給は補充瓦の性格を帯びている。窯構造は半地下式の窖窯で、平瓦を焼成部に敷き詰めて床面を形成しており、燃焼部には平瓦を並べて排水溝を造っている。水道山瓦窯では河内郡、塩屋郡、那須郡などを想定する文字瓦が出土している。

c. 上野国 上野国分寺瓦窯は西毛の藤岡窯跡群と東毛の笠懸窯跡群に分布している。上野国では6世紀前半に関東最大の古墳時代の窯である太田金山窯跡群が知られるが、奈良・平安時代には衰退する。その一方、7世紀以降、西毛地域で開窯する窯跡群として藤岡窯跡群がある。藤岡窯跡群は7世紀末が最古であり、9世紀後半頃まで操業を続ける窯跡群である。瓦窯は7世紀に遡るらしい。上野国分寺に関連した瓦窯として鹿ノ窯窯跡、山際窯跡、金草窯がある。

d. 信濃国 信濃の須恵器生産は7世紀以降盛んであり、8世紀中頃から後半にかけて

は一郡壹窯跡的な様相を呈している。信濃国分寺の創建瓦を焼成した窯は管見にのぼるかぎり不明であるが、平安初期の国分寺の補修瓦を焼成した窯として国分尼寺金堂北東100mにロストル式の2基に平窯がある。なお、軒瓦は在地性の強いものであるらしい。

e. 飛騨国 飛騨地域では6世紀後葉から7世紀前葉にかけて高山市楓が洞窯跡が造られるが概して須恵器窯の築窯は活発ではなく、7世紀中葉には窯は確認されていない。一方、7世紀後葉から8世紀前葉にかけて古代寺院の建立が目立ち、瓦窯や瓦陶兼業窯が築かれる。

飛騨国分寺の瓦を焼成した瓦窯には国分寺の北西方向に直線距離にして約35kmの位置に赤保山瓦窯^(注14)がある。赤保山瓦窯は4基の瓦窯と1基の須恵器窯があり、瓦窯はいずれも有段有階式の窖窯である。

f. 美濃国 美濃国分寺に関連した窯として国分寺から直線距離にして約240mと近接した位置に国分寺瓦窯^(注15)(丸山)がある。丸山瓦窯では3基の瓦陶兼業窯があり、2号窯は無段無階の窖窯である。

B. 東海道

a. 常陸国 常陸国は7世紀末の常陸最大の窯跡群である新沼窯跡群から始まる。新沼窯跡群は径10kmの範囲に7～9世紀の須恵器窯11か所、瓦窯3か所を確認している。水戸市木葉下窯跡は那須郡の中心地域であり、径1kmの範囲に高取支群(8世紀代の窯33基)、三ヶ野支群、金山支群があり、奈良時代前半に大量生産を開始し、常陸国の南北の供膳器需要の大半を担っている。

常陸国分寺に関連した瓦窯として瓦塚瓦窯、松山瓦窯、風返(三ツ谷)瓦窯跡、柏崎瓦窯跡がある。そのうち、窯の詳細がわかるものとして八郷町瓦塚瓦窯^(注16)がある。瓦塚瓦窯は常陸国分寺・国分尼寺の北方向に直線距離で約15kmの位置にあり、12基の窯跡を確認している。窯構造が明らかな1号窯は京都府木津町瀬後谷瓦窯タイプの地下式無階有段型式の窖窯、3号窯は有階有段型式の窖窯である。

b. 下総国 下総国分寺では龍正院瓦窯(千葉県香取郡下総町)で3基の地下式有段有階の窖窯(1・2号窯)と地下式無段有階の窖窯(3号窯)があり、下総国分寺と同範の宝相花文軒瓦が出土している。また下総国分寺の東300mで補修瓦を焼成した下総国分寺東瓦窯^(注17)3基(無段式の窖窯)と西430mに下総国分寺西瓦窯(詳細不明)がある。

c. 上総国 上総国における窯は市原市大和田窯跡群が7世紀前半に始まり、8世紀前半には市原市永田・不入窯へ移り、集中・継続的な生産が行われる。永田・不入窯は8世紀前半から9世紀初頭にかけて22基の窯が確認されている。国分寺に係わる窯跡としては国分寺への瓦の供給を一つの契機として開窯された南河原坂窯跡群^(注18)があり、ロストル式平

窯6基を含む瓦窯と須恵器窯19基を確認している。

上総国分寺では6種類の軒丸瓦、14種類の軒平瓦が出土しているが、創建時の軒瓦は国分僧寺、国分尼寺共通のもので、平城宮系の蓮華文軒丸瓦、同系唐草文軒平瓦で常陸国分寺の様相に似ている。創建時の瓦を供給した瓦窯には神門瓦窯跡、川焼瓦窯跡、南河原坂窯跡群があり、神門瓦窯跡は国分寺に近接した位置に築かれている。国分寺の修理瓦の供給のための瓦窯には南田瓦窯跡、祇園原瓦窯跡があり、いずれも神門瓦窯跡と同様、近接した位置に築かれている。窯の構造は創建時の神門瓦窯跡、川焼瓦窯跡、南河原坂窯跡群が窖窯構造であるのに対して、修理瓦を焼成した南田瓦窯跡、祇園原瓦窯跡はロストル式の平窯である。

d. 武蔵国 武蔵国分寺は武蔵国府推定地(京所国庁推定地)の北方約2.3kmの位置にある。武蔵国分寺での瓦窯として南比企丘陵と南多摩丘陵が知られている。

南比企丘陵^(注19)は5世紀末葉に開窯したもので、数百基(500基以上)の窯を推定している東国最大の窯跡群で、10世紀前半まで続く窯跡群である。南比企窯跡群では国分寺のほか各時代の寺院所用瓦を須恵器とともに焼成した瓦陶兼業窯で焼成している。国府、国分寺の造営を契機として須恵器とともに瓦の生産を行っている。南比企丘陵では金沢窯跡が無段式の窖窯がある。国分寺出土の軒瓦の分類から、南比企丘陵では在地系軒瓦とともに平城宮系軒瓦も生産している。一方、南多摩丘陵は7世紀後半～8世紀前半に御殿山地区から大丸地区、和田地区に移り、9世紀後半から10世紀代には武蔵最大の窯跡群である。

大丸窯跡群ニュータウン遺跡群ナンバー513遺跡は国分寺の南4.5kmにある瓦陶兼業窯で窯構造は有段式窖窯で、軒瓦は国府系の文様である。同じ南多摩窯跡群の谷野窯跡でも同様の有段式窖窯構造のものである。

南比企丘陵では金沢窯跡^(注20)が無段式の窖窯、南多摩丘陵にある大丸窯跡群(国分寺の南約4.5km)の多摩ニュータウン遺跡群ナンバ・513遺跡は有段式窖窯、八王子市谷の窯跡も有段式窖窯である。

末野窯跡群は6世紀末に開窯され、7世紀代には武蔵最大の窯跡群となる。古墳時代には山裾の広い緩斜面に開折する小谷に窯が集中するが8世紀には山中に入る傾斜地にあり、国分寺瓦を生産したと推定されているが、詳細は明らかではない。

八坂前窯跡^(注21)は広義の新久窯跡の中に位置するもので、国分寺の塔の再建に伴う瓦窯であり、須恵器とともに焼成している。窯構造は5号窯が半地下式無段無階の窖窯、6号窯は地下式の無段無階の窖窯である。新久窯跡も承和十年の塔再建の瓦窯であり、A1・2号窯がある。なお、八坂前窯跡では承和十二年を上限として須恵器生産が始まり、国分寺の塔の再建にもなって瓦窯に変更、そののち須恵器生産にもどると指摘されている。

武蔵国分寺^(注22)の造営に対して各郡に瓦を割り当てたが、多くの群には窯が存在せず、窯場を持たない郡は窯場をもつ郡に瓦を発注して国分寺に納めたと郡名瓦の分析から指摘されている。

e. 相模国 武蔵国分寺と同様、創建時の瓦窯は明らかでないが、国分寺補修瓦を焼成した瓦窯として瓦尾根瓦窯^(注23)がある。瓦尾根瓦窯は4基からなり、1号窯は登窯を構築したのちに平窯に改造している。

f. 甲斐国 甲斐国では窯の調査例が少なく、7世紀後半の瓦陶兼業窯の天狗沢窯が3基確認されているのみである。

g. 遠江国 浜名湖の西岸域約9km、南北8kmに198か所の地点で窯跡が点在する湖西窯跡群がある。湖西窯跡群は5世紀末に明通り窯跡から開窯するが、大規模な窯跡群ではなく、操業期間も短く、点々と立地を変えて操業しているようであり、須恵器とともに埴輪を焼成した兼業窯である。瓦生産が行われるのはこの湖西窯と対峙した形で8世紀中頃に遠江東側で、須恵器ととも瓦を焼成した瓦陶兼業窯が造られる。国分寺関連瓦窯としては遠江国分寺瓦窯^(注24)がある。寺谷瓦窯は国分寺の北約5.5kmにあり、平安時代のロストル窯が確認されている。清ヶ谷古窯は国分寺の東12kmで、奈良時代後半以降、平安時代中期までの3期に亘って操業された窯である。

h. 三河国 三河国分寺・国分尼寺に関連した瓦窯として豊川市西明寺西古窯、天間古窯、赤塚山古窯が知られており、窯体構造がわかるものとして赤塚山古窯がある。赤塚山古窯^(注25)は三河国分尼寺の北東約1.5kmの位置にあり、ロストル型式の平窯1基を確認している。この窯からは素弁八弁蓮華軒丸瓦と飛雲文軒平瓦が出土している。

C. 北陸道

a. 佐渡国 佐渡国分寺の瓦窯としては、日本海の広範囲に製品を供給したと思われる一大生産遺跡である小泊窯跡群(100基)があり、佐渡国分寺の南東約20kmに位置する。また、詳細は明らかでないが経ヶ峰窯跡がある。

D. 畿内

近畿地方では国分寺の所在やその実態、国分寺瓦窯については明らかではなく、今回検出した丹波国分寺瓦窯の調査が進めばその様子の一端が明らかになるものと思われる。

E. 山陰道

中国地方も国分寺に関連した瓦窯の実態は明らかではない。ただ、軒瓦を分析した亀田修一^(注26)によると平城宮式瓦が美作・備中・安芸国分寺で使用されており、備前国分寺では高句麗系、長門国分寺では新羅系軒丸瓦を採用している。周防国分寺では国分寺修築瓦を焼

成した窯として江泊古瓦窯跡の窖窯3基が知られている。

a. 石見国 石見国では5世紀末～6世紀初めに浜田市日脚1号窯で開窯され、7世紀前葉には各地で須恵器生産が行われている。

石見国分寺に関連した瓦窯には、国分寺の南西約100mにある国分寺^(注27)瓦窯がある。国分寺瓦窯は焼成部にロストルを持たない無床式の平窯(京都府木津町梅谷7・8号窯タイプ)で、軒瓦のなかにも平城宮式の瓦を多く含んでいる。石見国分寺は「石見国守襲撃事件」が良く知られ、国家が大きく関与した国分寺である可能性が高い。

F. 西海道

a. 筑前国 筑前国での最古の瓦窯として古墳時代からつづく牛頸窯跡群内にある大宰府市神ノ前窯跡が知られている。神ノ前窯跡は瓦陶兼業窯であり、供伴する須恵器はTK209段階と位置づけられている。この筑前国は大宰府にある観世音寺に関連した瓦窯に福岡市老司瓦窯がある。

筑前国分寺に関連した瓦窯として国分寺^(注28)瓦窯がある。筑前国分寺瓦窯では1基の窯を確認しており、その窯構造は側壁から天井部にかけて日干しレンガを積み上げたもので、京都府精華町乾谷瓦窯に近似しているもので、煙道部には方形の穴が2か所開けられている。

b. 筑後国 7世紀代の瓦陶兼業窯である八女市牛焼谷窯跡群が知られているが、筑後国分寺の創建時の瓦窯は明らかでなく、「延喜十九年」銘の瓦が出土した西行山瓦窯があるが窯体構造は不明である。

c. 豊前国 豊前国では6世紀末～7世紀初頭に瓦陶兼業窯である中津市伊藤田窯跡群、踊ヶ迫窯跡群が知られており、7世紀後半には周辺の廃寺に瓦を供給している。また8世紀には宇佐市虚空蔵寺に瓦を供給した虚空蔵寺瓦窯など数多く知られている。国分寺に関連した瓦窯としては国分寺の南東3kmにある船迫窯跡群^(注29)がある。船迫窯跡群は地下式有段有階の窖窯が2基確認されている。平安時代の瓦窯としては徳政瓦窯がある。

d. 肥前国 肥前国分寺の瓦窯には柿園瓦窯跡がある。柿園瓦窯跡は平窯4基からなり、燃烧部と焼成部の境には隔壁があり、焼成部には6条の火道がある。

e. 肥後国 肥後国では15か所の瓦窯が確認されており、国分寺瓦窯としては煤谷寺瓦窯が知られているが、窯体構造の詳細は不明。国分寺改修の瓦窯としては無段無階の窖窯2基を含む神園山瓦窯^(注30)がある。

f. 薩摩国 薩摩国分寺の瓦窯には鶴峯窯跡が知られている。鶴峯窯跡^(注31)は須恵器窯1基と焼成部床面に4条の火道がある瓦窯が2基ある。

6. 丹波国分寺の瓦窯

亀岡市三日市遺跡における丹波国分寺瓦窯の発見を契機として、亀岡盆地での国分寺造営以前の寺跡の様相、全国国分寺における瓦窯の様相を列記した。

亀岡盆地における国分寺造営以前の寺跡は、盆地が比較的広いとは言いながら四寺がほぼ同時に造営されるという、寺の造営が盛んな地域であったことが指摘できる。これらの寺院の性格については旧山陰道の起点になる地域であり、現撰丹街道にあるという交通の要衝であり、その要衝の地に寺跡が造営されている。また古墳時代から続く有力首長の墓が近接しているものとして三ツ塚古墳にある観音芝廃寺、坊主塚古墳・天神塚古墳・出雲車塚古墳に近接した池尻廃寺、群集墳が密集する與能廃寺・桑寺廃寺などがある。これら四寺を概観していくと古墳時代から続く基盤のもとに各寺が造営されていることがわかる。

各寺の創建時期は7世紀後半から末葉の時期で、その廃絶は観音芝廃寺の平安時代末葉を除いて丹波国分寺の造営時期の奈良時代後半～末葉には廃絶している。想像をたくましくすれば丹波国分寺の造営に際して廃絶され、その一部の部材は国分寺の造営に利用されたとも考えられる。ただ、篠窯跡群は丹波国分寺や推定丹波国府跡ともいわれる千代川遺跡へ須恵器を供給、さらに長岡京・平安京へも須恵器を供給しており、官用的な窯の性格を帯びた窯跡群である。観音芝廃寺はそれらを統括したような私寺であることから、国司あるいは国家が寺の造営を容認していた可能性が考えられる。

国分寺の造営に際して下野国国分寺瓦窯である町谷瓦窯跡では那佐郡・芳賀郡などの郡名を印刻した瓦が出土している。同じく国分寺の補修瓦を生産したと思われる水道山瓦窯でも河内郡・塩郡・那佐郡とも読める文字瓦が出土している。武蔵国分寺の郡名瓦を分析した高橋一夫^(注32)によると「窯跡をもたない郡は窯場をもつ郡に瓦を発注して国分寺に納めた」という指摘があることは前述したとおりであり、郡司の多くが半強制的に国分寺造営に関与させられたことが窺える。丹波国分寺でみると国分寺造営以前の寺院を廃絶してまでもその資材を投入させられていたのではないかと考えている。

丹波国分寺では二町域を有する寺域で、塔・金堂・講堂・鐘楼などで多くの瓦が出土しており、前述のように国分寺独自の文様と平城京諸寺の系列の瓦で構成され、軒丸瓦13種・軒平瓦10種の出土している。今回検出した三日市遺跡では軒丸瓦・軒平瓦とも1種のみであり、他の多くの軒瓦の出土、生産の状況は不明である。亀岡市教育委員会による磁気探査の結果では1基の窯の存在は確認されているが、京都府教育委員会の試掘結果では今回調査地の南側にも窯が広がる可能性が指摘されており、広い範囲に別系統の軒瓦を生産していた可能性も考えられる。ただ、1か所での集中生産には粘土・燃料などに限界が

あること。京・宮のように継続的に瓦生産を行ったことは想像できず、一過性、国分寺造営が完成すれば瓦窯の必要性がなくなるため、これまでの寺院などで使用された瓦窯でその多くの瓦は生産していたものと思われる。

各国分寺の造営当初の瓦窯の実態については今回丹波国分寺での初例の瓦窯が検出したのみであるように、その実態は不明であることが大半である。わずかに知られる国分寺創建当初に瓦窯の実態が知られているものとして下野国分寺での栃木県佐野市町田瓦窯の7基の窯、同水道山瓦窯の下野薬師寺の造営に係わる窯に新たに1基の窯の増築して国分寺の造営に対応したものが知られているほか、上津主廃寺・推定河内郡衙跡に供給した例。上総国分寺の神門瓦窯跡・川焼瓦窯跡・南河原坂窯跡群など広範囲の瓦窯から供給されている例がある。

地方において寺院造営技術の有無、前時代の生産技術の差異によって受け入れ体制がこととなり、中央での技術の習得した技術者が地方へ派遣されたことが考えられる。これは平城宮あるいは平城宮系瓦を使用した軒瓦の分布でも窺い知ることができる。平城宮あるいは平城宮系瓦を使用した軒瓦は軒丸瓦^(注33)6225系、軒平瓦6663系が駿河・上総・美作・備前・国分寺で使用され、6313系軒丸瓦は甲斐・常陸・伯耆・播磨・備後国分寺で使用されている。一方、窯構造をみるとその多くが古墳時代から続く階・段の有無はあるが竈窯構造であり、国分寺創建時に有牀式平窯構造^(注34)のものを採用したのは陸奥国分寺の蟹沢瓦窯、三河国分寺の赤塚山古窯など数例に限られている。また前述した有牀式平窯構造に定着する前の京都府木津町梅谷瓦窯の梅谷B・Cタイプに窯構造の類似したものは西国に多く、石見国分寺瓦窯、筑前国分寺瓦窯があり、形態を異にするが豊前虚空蔵寺の系譜をひく可能性がある焼成部床面に火道をもつ窯として薩摩国分寺の鶴峰瓦窯がある。こうように窯体構造と平城宮あるいは平城宮系軒瓦の分布状況は一致しない傾向にある。ただ、国分寺の補修のために造られた平安時代の瓦窯の多くは有牀式平窯構造であり、平安時代にはこの窯構造のものが定着したものと思われる。

三日市遺跡における国分寺瓦窯の発見を契機として国分寺への瓦の供給体制を明らかにしたいという思いで書き始めた。国分寺造営にともなう地方瓦窯の変化、軒瓦の特徴からみた国家・諸寺との関連、国分寺造営に伴う瓦の供給体制など検討できることはないかという思いで資料収集を進めたが、なお、なんの結論も得られないままにこの駄文を提出した。今後さらに検討を加えたい。

(いしい・せいじ＝当センター調査第2課調査第3係長)

注1 石崎善久「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成15年度) (3)三日市遺跡第3次」

- (『京都府遺跡調査概報』第114冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 注2 亀岡市教育委員会「三日市遺跡 丹波国分寺瓦窯跡の磁気探査概要報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第68集) 2004
- 注3 樋口隆久「丹波国分寺跡」(『亀岡市史』資料編第一巻 亀岡市市史編さん委員会) 2000
- 注4 山崎信二「平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的研究」
- 注5 柴暁彦「池尻遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注6 中澤勝「池尻遺跡第2次発掘調査概要」(『亀岡市文化財調査報告書』第55冊(財)亀岡市教育委員会) 2000
- 注7 柴暁彦「京都府亀岡市池尻廃寺出土瓦の検討」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注8 森下衛「千代川遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注9 樋口隆久「與野廢寺」(『亀岡市史』資料編第一巻 亀岡市市史編さん委員会) 2000
- 注10 樋口隆久「観音芝廢寺発掘調査報告」(『亀岡市文化財調査報告書』第20冊 亀岡市教育委員会) 1988
- 樋口隆久「観音芝廢寺」(『亀岡市史』資料編第一巻 亀岡市市史編さん委員会) 2000
- 注11 工藤雅樹『宮城』(日本の古代遺跡15 保育社) 1984、228頁
- 注12 『古代東国の産業－那須地方の産業と製鉄業』(栃木県なす風土記の丘資料館第2回企画展 栃木県教育委員会) 1994
- 注13 大川清『下野の古代窯業遺跡』本文編1・2、資料編(栃木県教育委員会) 1975
- 注14 田中彰「飛驒」(『新修国分寺の研究』第7巻補遺 吉川弘文館) 1997
- 注15 埋蔵文化財研究会『古代寺院の出現とその背景』(埋蔵文化財研究会) 1997、306頁
- 注16 黒沢彰哉「第四 常陸国四国分寺瓦窯の様相」(『新修国分寺の研究』第7巻補遺 吉川弘文館) 1997
- 注17 滝口宏『市川市史』第2巻 1974
- 注18 大野康男「第四章第二節国分寺の建立」(『房総考古学ライブラリー 歴史時代(1)』((財)千葉県文化財センター) 1993
- 注19 渡辺一「武蔵国の須恵器生産の各段階」(『王朝の考古学』雄山閣出版) 1995
- 注20 須田勉「国分寺造営勅の評価－諸国国分寺の造営実態－」(『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版会)
- 注21 小林昭彦『入間市八坂前窯跡』(八坂前窯跡調査会 入間市教育委員会) 1984
- 注22 高橋一夫『埼玉における古代窯業の展開』((財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団) 1991
- 注23 大川清『日本の古代瓦窯』(雄山閣出版)
- 注24 安藤寛ほか『平成元年度遠江国分寺跡周辺周辺国分寺・国府台遺跡－発掘調査報告書』(岩田市教育委員会) 1990
- 注25 齋藤嘉彦「第二三河国四瓦窯」(『新修国分寺の研究』第7巻補遺 吉川弘文館) 1997

- 注26 亀田修一「瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦」(松岡弘宣編『古代王権の交流 6 瀬戸内海地域における交流の展開』 名著出版) 1995
- 注27 内田律雄・江川幸子「第二石見」(『新修国分寺の研究』第7巻補遺 吉川弘文館)
- 注28 高橋章「第二編第九章 都府楼の瓦を焼く(1)国分瓦窯跡」(『大宰府市史考古資料編』太宰府市) 1992
- 注29 高尾栄市ほか『船迫窯跡群』(築城町文化財調査報告書) 1998
- 注30 三島格「神園山瓦窯跡」(『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会) 1973
- 注31 小田富士雄「薩摩国分寺瓦窯の発見」(『九州考古学』31号) 1967
- 注32 注22に同じ
- 注33 森郁夫「平城宮系軒瓦と国分寺造営」(『日本の古代瓦』雄山閣出版) 1991
- 注34 有牀式平窯は平城京・宮の瓦を供給した官用である奈良山丘陵の瓦窯で採用されるが、地方への普及は遅れ、国分寺造営で採用されなかった傾向がある。ただ、平安時代以降のある時期からこの窯構造が定着したものと思われる。有牀式平窯が定着する前には京都府木津町梅谷瓦窯のような平窯があり、同様の窯構造のものは石見国分寺瓦窯、筑前国分寺瓦窯がある。また形態は異にするが豊前虚空藏寺瓦窯の系譜をひく可能性があるものに薩摩国分寺瓦窯(鶴峯瓦窯)がある。

